技術者からの視点

●第46回●

街路樹

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

筆者が住む郊外の住宅地にイチョウ並木がある。8メートル幅の車道の両側の歩道に植えられている。かつては弱々しかったイチョウも、幹の太さ20センチぐらいに育ち、600メートルほど続く直線の並木は、黄葉の季節にはそれなりの景観になった。

冬場の剪定では、数年前から枝を切り詰める量が多くなったように感じていたが、今冬は、これから黄葉という時期に、まだ緑の葉をつけている枝のほとんどがばっさりと切られ、20センチほどの長さの枝が少し残るだけになった。樹幹のみの棒状になった樹もある。まるで、はりつけ用の柱の行列のような光景になった。

街路樹の負の面ばかりを見る人々

イチョウが黄葉すると、毎日、大量の葉を落とす。雨が降ると、落ちた葉は滑りやすくなる。安全のため、歩道ぞいの家では落葉かきが日課になる。風が吹くとすぐに葉が落ちてくるので、一日に幾度も落葉かきをする人もいる。

イチョウの葉は水気が多く、地面にこびりつくので、落葉かきは力のいる仕事だ。高齢者比率の高い住宅地なので、落葉かきに悩む高齢者からの苦情に応えて、黄葉の前に管理者が剪定を行ったのだろうと思った。

「道路法」では、街路樹は「道路の付属物」にあたり、道路管理者が維持管理を行うことになる。イチョウ並木は市道にあるので、市の担当者に聞いてみると、若い年齢層からの苦情が多いのだという。落葉の問題だけでなく、毛虫が発生する、歩きにくい、地下の根が伸びる、根元に犬の糞尿が残されるなど、街路樹全体についての苦情だという。

市の財政状況ではきめ細やかな管理ができないので、苦渋の決断として、早めの、思い切った剪定を行ったという。剪定作業を行っていると、さらに短く切り込むようにとの住民からの要求があったそうだ。

イチョウだけではない。市道にある落葉樹の並木は大きく切り込まれ、高さが不ぞろいで痛々しく感じる。住宅地に長く住んでいる住民は街路樹の成長を見守ってきたので、景観には、落葉かきが必要なことを理解している。しかし、生育した街路樹しか知らない世代は、街路樹の持つ負の面に耐えることができないのであろう。

市は里山の保全や、宅地の生垣緑化など、市民・事業者・行政の協同による緑づくりをうたっている。せっかく育った街路樹だ。苦情に対して、異なる対応がとれなかったのか残念に思う。

旅人とともにあった街路樹の歴史

日本の街路樹には千年以上の歴史がある。

8世紀には太政官符で、公道に並木をつくる指示が出されている。木陰が旅人の休息の場になり、木の実が食料になるようにと果樹が勧められた。都での労役に駆り出された人たちは、街路樹のおかげで命を救われることもあったと思う。これらの並木は、手入れができないままに消え失せたのであろう。

江戸時代の初期、幕府は、道中往来の安全と、幕府の威信を示すことを目的として、諸街道を整備し、マツ、スギ、ケヤキなどの並木を植え、一里塚を築いた。

安藤広重の浮世絵「東海道五十三次」には多くのマツ並木が描かれている。当時の姿を残している愛知県豊川市の「御油の松並木」について、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』には、「この先の松原へは、わるい狐が出おって、旅人衆がよく化かされ申す」(岩波文庫)と書かれている。

そのころに植林された並木に、「日光杉並木」、樹高40メートルを超す巨木のある、宮崎県狭野神社の「狭野の杉並木」、東京都府中市大国魂神社参道の「馬場大門のケヤキ並木」などがある。

これらの並木は、枯れ木の伐採、植え替え、下草刈りを行って、現代まで維持されてきた。明治維新後に行われた、旧街道を直線的に変える近代化政策や、第2次世界大戦時の巨木供出などの災難を潜り抜けて、いずれも国の史跡名勝記念物になっている。

人がつくり出す美しい風景

明治政府は近代化政策の一環として、都市部に街路樹を導入した。1874(明治7)年、銀座にサクラとマツが植えられたが、枯れてヤナギに替わり、そのヤナギも空襲でなくなり、歌碑が残っている。明治神宮表参道のケヤキ並木は大正時代の植樹だが、空襲でほとんどが被害を受け、現在の景観は戦後に植樹されたものである。

桜の名所も、「吉野の桜」や京都仁和寺の「御室桜」など、平安時代から有名だったいくつかを除くと、そのほとんどは明治以後に植樹されたものだ。

美しい自然と思っているものの多くが、人がつくる「人工物」である。世界自然遺産として登録されているものは、「知床」「屋久島」「白神山地」であり、我々が自然保護活動の対象としている里山や、マツ、スギ、ヒノキの美林や桜並木には、人の手が入っている。

人の手が入ったものを保存するには、手入れが必要になる。阿蘇の草千里、箱根の十国峠、富士の裾野、白樺湖、美ヶ原なども、定期的な草刈りや火入れの結果の風景だ。むしろ、日本中に点在する鎮守の森が自然を残しているそうで、鎮守の森を守るには、下草刈りなど、人の手を入れてはならないそうだ。

街路樹は、典型的な「人工物」であり、苗木の育成、剪定作業、病気になった樹木の伐採・交換、植え替えるための樹木の栽培などが欠かせない。美しい街路樹を次世代に残すには、住民と行政が共通の価値観を持ち、手間を分かち合う必要がある。行政も、住民の苦情に悩むだけでなく、長期目標を積極的に住民に開陳してほしい。

江戸の街並みを残す土地を訪ねると、高い塀越しに「見越しの松」が見られる。大きな店は、手入れの行き届いた庭木を、塀の外からも見えるようにしつらえた。豪商が蓄えた富の一部を、庶民に裾分けしている。

現代は、美しい公園をつくり、目抜き通りに並木を植えて、国力を誇示している。

一方、住宅地の街路樹は、地域社会が行う町づくりである。住宅地の美しい並木は、地域住民の強い絆を示すものだ。